

受付番号 (1)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月 日

採択研究題目	近現代日本史における政治思想・イデオロギー及びそのコミュニケーションの再考 = 地域社会の観点から																																															
講座・コース名	現代日本学																																															
代表者	ゴダール・ジェラルド・クリントン																																															
連絡先	内線: 8137				email: godart@imc.hokudai.ac.jp																																											
共同研究メンバー	(所属・身分) ウインクラー・クリス (メディア・講師) 佐々田博教 (メディア・准教授)																																															
研究協力者	(所属・身分)																																															
採択総額 (千円)	350																																															
使途の明細 (千円)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">国内旅費</th> <th colspan="2">外国旅費</th> <th colspan="2">書籍・謝金等</th> <th colspan="2">その他</th> </tr> <tr> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ゴダールの研究発表及び研究のための資料収集</td> <td>176</td> <td>2016年9月アメリカ政治学会大会での報告</td> <td>174</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>176</td> <td>計</td> <td>174</td> <td>計</td> <td></td> <td>計</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="2">予算総額</td> <td colspan="2">350</td> <td colspan="2">決算総額</td> <td colspan="2">350 = 0</td> </tr> </tbody> </table>								国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他		事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	ゴダールの研究発表及び研究のための資料収集	176	2016年9月アメリカ政治学会大会での報告	174					計	176	計	174	計		計		予算総額		350		決算総額		350 = 0	
国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他																																										
事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額																																									
ゴダールの研究発表及び研究のための資料収集	176	2016年9月アメリカ政治学会大会での報告	174																																													
計	176	計	174	計		計																																										
予算総額		350		決算総額		350 = 0																																										
研究概要	本研究プロジェクトは、明治から現代にかけての日本における政治思想・イデオロギー(理念、アイデンティティ、自然観を含む)に注目し、それらとそのコミュニケーションが地域社会の形成・発展に与えた影響を再考することを目的としている。こうした論考を行う上で、宗教、政党、農政といった地域社会と密接に関連した3つの分野において事例研究を行い、幅広い視点から政治思想やイデオロギーが与えた影響を探る。																																															
研究実績・内容	佐々田が戦前日本における農政思想の発展・変化の過程を探り、資料収集の活動を行い、論文と著書を執筆した。ウインクラーは、日本の各政党の政権公約やマニフェストにおける地域格差のテーマを探り、英語論文を執筆した。また海外の学会で研究報告を行った。ゴダールは、国内の学会において研究発表を行い、近現代日本史における進化論受容とその政治・イデオロギー的な役割についての著作を海外の出版社から一冊出版した。																																															
研究成果・業績等	● 佐々田が研究結果を論文にまとめ、2017年のThe European Association of Japanese Studies (EAJS)の学会で発表する予定である。その上、農政思想についての著書を執筆し、今年中に勁草書房から出版する予定である。 ● ウインクラーが研究結果を基にした論文を、国際的な学術雑誌に提出した。2016年9月に開催された「First Japanese Consortium for Political Science at Hokkaido University」																																															

	で研究発表。2016 年 9 月 American Political Science Association (APSA)の学会で研究発表。 ● ゴダールが著作を一冊出版した。タイトルは『Darwin, Dharma, and the Divine: Evolutionary Theory and Religion in Modern Japan.』ハワイ大学出版社とコロンビア大学の Weatherhead Institute 出版(2017 年)。2016 年 6 月 2-3 日東京で行った日本近代仏教史研究会、2016 年 7 月 3 日の Asian Studies Japan Conference (ASJC) 学会、2016 年 10 月 24-25 日の European Association for Japanese Studies (EAJS) Conference (神戸)にて「東亜連盟運動」についての研究を発表した。
--	---

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月 26日

採択研究題目	東アジア観光文化研究会																																															
講座・コース名	観光文化論講座・メディア文化論講座																																															
代表者	金ソンミン																																															
連絡先	内線: 5393				email: kim@imc.hokudai.ac.jp																																											
共同研究メンバー	金成玟(観光文化論講座 准教授) メディア文化研究、東アジア大衆文化論 岡本亮輔(観光文化論講座 准教授) 宗教社会学、聖地観光論 周倩(メディア文化論講座 助教) メディア社会学、日中比較社会学																																															
研究協力者	(所属・身分)																																															
採択総額(千円)	1,700,000 円																																															
使途の明細(千円)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">国内旅費</th> <th colspan="2">外国旅費</th> <th colspan="2">書籍・謝金等</th> <th colspan="2">その他</th> </tr> <tr> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>出版打ち合わせ</td> <td>100</td> <td></td> <td></td> <td>謝金(翻訳)書籍</td> <td>490 110</td> <td>出版補助金</td> <td>1000</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>100</td> <td>計</td> <td></td> <td>計</td> <td>600</td> <td>計</td> <td>1000</td> </tr> <tr> <td colspan="2">予算総額</td> <td colspan="2">1700</td> <td colspan="2">決算総額</td> <td colspan="2">1700 =0</td> </tr> </tbody> </table>								国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他		事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	出版打ち合わせ	100			謝金(翻訳)書籍	490 110	出版補助金	1000	計	100	計		計	600	計	1000	予算総額		1700		決算総額		1700 =0	
国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他																																										
事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額																																									
出版打ち合わせ	100			謝金(翻訳)書籍	490 110	出版補助金	1000																																									
計	100	計		計	600	計	1000																																									
予算総額		1700		決算総額		1700 =0																																										
研究概要	本共同研究は、「東アジア」と「観光文化」を主なキーワードに、近年の東アジアにおける観光をめぐる諸現象に多角的に光を当て、東アジアという地理的・歴史的空間がどのように再構築され、文化的に想像されているのかを明らかにすることを目的とする日中韓共同研究である。そのため、ソウル大、中山大学との共同研究を進め、その成果として『東アジア観光学—まなざし・場所・集団』(亜紀書房・2017年)の出版などを行った。																																															
研究実績・内容	①高野麻子氏講演会「観光とセキュリティ——生体認証技術が生み出す「安全」な移動 とはなにか——」 講師：高野麻子氏(明治薬科大学) 日時：2016年7月8日(金) 場所：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院メディア棟 608 ②日中韓国際シンポジウム「Tourism and Culture, the Trace of East Asia in the World」 2016年10月21～23日, 中山大学。発表者(プログラム順): KANG Myungkoo, NAM Eun Young, ZHOU Qian, Kim Sungmin, CHOI Kyung-Eun, LUO Qiuju, YANG Rong, Okamoto RyoSuke, Che Ganghua, LIANG Yucheng. ③HU-SNU ジョイントシンポジウム「Re-imagining East Asia in Tourism」 日時：2016年11月25日(金) 場所：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 608号 発表者：Jordan SAND (Georgetown University), Masashi NARA (Hokkaido University), Myungkoo KANG, Eunyong NAM (Seoul National University) ④ソウル大アジアセンター(SNUAC)主催国際会議 Tourism in Asia II:																																															

	Travelling Asia and Geographical Imaginaries Date : March 24 2017 Venue : Seoul National University Asia Center # 303 プログラム : LIANG Yucheng (Sun Yat-sen University) ENDO Reach, KIM Sungmin (Hokkaido University) KANG Myungkoo, NAM Eun Young, ZHOU Qian(Hokkaido University) ZHANG Hong (Sun Yat-sen University)
研究成果・業績等	①金成玟・岡本亮輔・周倩編『東アジア観光学—まなざし・場所・集団』（亜紀書房・2017年） ②Sungmin Kim, “Japanese Tourists and the Restructuring of Seoul: Focusing on the Developments in the Gangnam Area,” <i>Asia Review</i>, Vol.6 , No.2 , 2017. ③ Ryosuke Okamoto, “Authentic Fake, Diversification of Authenticity in Tourism Culture: The Case of Tomb of Christ in Japan,” <i>Asia Review</i>, Vol.6, No.1, 2016. ④Qian Zhou, “Foreign Travels of the Chinese Middle Class and Self Construction in Social Media” <i>Asia Review</i>, Vol.6, No.1, 2016.

（A 4判2頁以内で作成してください）

受付番号 (3)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月17日

採択研究題目	拡張現実の時代における〈場所〉と〈他者〉に関する領域横断的研究							
講座・コース名	観光文化論講座・メディア文化論講座・観光創造論講座							
代表者	岡本亮輔 (メディア・コミュニケーション研究院・観光文化論講座)							
連絡先	内線: 5392				email: okamoto@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	岡本亮輔 (観光文化論講座) 伝統文化の観光的変容、場所論 金ソンミン (観光文化論講座) メディア文化と自己/他者性、境界の政治学 清水賢一郎 (観光文化論講座) 東アジアの景観論、自己/他者論 奈良雅史 (観光文化論講座) 中国ムスリムの観光実践、自己/他者論 山田義裕 (観光文化論講座) 現代コミュニケーションと自己/他者論 山村高淑 (観光創造論講座) コンテンツツーリズムの場所論 西村龍一 (メディア文化論講座) 現代メディア文化と場所論、自己/他者論 増田哲子 (メディア文化論講座) 視覚メディア文化と自己/他者論 周 倩 (メディア文化論講座) メディアの実践と空間的消費、他者論							
採択総額 (千円)	350							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	研究者招 聘	330			講演会謝 金	20		
	計	330	計	0	計	0	計	0
	予算総額 350－決算総額 350＝0							
研究概要	本研究では、情報空間の拡充によって現実空間が多層化される現状を拡張現実の時代としてとらえ返す。そして、そうした社会状況下で生じるコミュニケーションや対人関係の変容を、メディアと観光を手掛かりに考察することを目的とする。							
研究実績・内容	「拡張現実」という新たなテーマ設定の理論的輪郭を明確にすることを主目的に6名の研究者を招聘し、3回の研究会を行った。 ①「観光とセキュリティ：生体認証技術が生み出す「安全」な移動 とはなにか」(2016年7月8日) ②「3・11後の観光について：「福島学」の研究・実践から」(2016年9月1日) ③「観光研究のフロンティア」(2017年2月10日)							
研究成果・業績等	金成玖・岡本亮輔・周倩 (編)『東アジア観光学：まなざし・場所・集団』亜紀書房、2017年3月24日。							

(A4判2頁以内で作成してください)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。) 提出日 2017年4月28日

採択研究題目	リスク・プロジェクト (リスク、政治、災害)							
講座・コース名	公共伝達論／国際広報論／外国語教育研究部／北海道文教大学／慶応大学							
代表者	辻本 篤							
連絡先	内線: 5361				email: tsujimoto@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	1. リスクと公共性・政治性分野 (理論研究) 鈴木純一 (リスクと公共性) 長島美織 (リスクの政治性と公共性) Piers Williamson (リスクと政治) 王 瞻 (D3) (リスクとコミュニケーション) 糸川悦子 (D3) (リスクとエネルギー) 市原攝子 (D3) (リスクと健康) 2. 災害 (特に原発災害) とリスク分野 (実証研究) 伊藤直哉 (災害とリスク) 辻本篤 (災害とリスク)							
研究協力者	渡部淳 (北海道文教大学・講師, 災害とサブ・ポリティクス) Yiwei Li (慶応大学・助教, 災害とリスク)							
採択総額 (千円)	150							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
			国際学会での発表	150				
	計		計	150	計		計	
	予算総額 150 － 決算総額 150 = 0							
研究概要	以下、それぞれの領域における研究概要 (主要分) は以下の通りである。 1. リスクと公共性・政治性分野 (理論研究) ・政治学の科学的成立要件に関する検討 ・ポスト 3.11 のリスク社会における民主主義再生への展望と司法に関する検討 ・サブ・ポリティクスをつなぐ政治的 NGO の機能とその不在に関する提言 2. 災害 (特に原発災害) とリスク分野 (実証研究) ・ELM モデル (精緻化見込みモデル) を利用した情報獲得プロセスの検討 ・自然災害におけるリスク認知と災害経験の応用展開 ・危険物取扱施設における環境影響火災とリスク認知の状況							
研究実績・内容	支援を得られた予算によって実施された研究の成果は以下になる。 Junjiao Zhang, <u>Naoya Ito</u> , Wenxi Wu, Zairong Li., "Don't Let Me Think!" Chinese Adoption of Travel Information on Social Media: Moderating Effects of Self-disclosure and Risk, Proceedings of the International Conference in Rome, 2017, p.639-653, Springer. 中国人が旅行をする際、SNS から旅行情報を獲得しようとするが、その情報の獲得過程は ELM モデル (精緻化見込みモデル) によって説明され得ると仮説が立てられた。当該モデルを利用して、情報獲得過程において「リスク認知」と「情報開示」という二つのルートを経由して情報が消費されていることが明らかにされた。							

研究成果・業績等	上記成果以外に、本プロジェクトにおける研究成果は以下になる。 ◆【学会誌・大学紀要へ掲載】 【査読有】Guo, Y. & <u>Li, Y.</u> (2016). Getting ready for mega disasters: The role of past experience in changing disaster consciousness. <i>Disaster Prevention and Management (SSCI, Impact Factor=0.987)</i>, 25(4), 492-505. 【査読有】渡部 淳「サブ・ポリティクスをつなぐ政治的 NGO の機能とその不在－災害リスク社会日本の民主主義活性化に関する一試論」北海道文教大学論集 no. 18, 2017 年, pp.19-29. 【査読無】長島, 美織 (2017) 「「保険とリスク」(フランシス・エワルド著)を読む: スタディ・クエスチョン・メソッドの試み その 1: 第 1 段落から第 4 段落: insurance について」, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, No.24, 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 【査読無】長島, 美織 (2017) 「スタディ・クエスチョンで読む古典: 「政治学は科学として成りたろうかー理論と実践の問題」(マンハイム)を読む (その 1)」, メディア・コミュニケーション研究, No.70, 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 ◆【国際学会での発表】 Masateru Noguchi, <u>Naoya Ito</u>, The Impact of CSR on Organizational Commitment, Proceedings of International Conference on Business and Information, Winter Session, 409-418, 2016. (The Best Paper Award), 12 November 2016, Bangkok. Masako Amino, <u>Naoya Ito</u>, Customer Loyalty with Two Aspects: The Roles of Customer Satisfaction and Switching Costs, Proceedings of International Conference on Business and Information, Winter Session, 44-60, 2016. (The Best Paper Award), 12 November 2016, Bangkok. <u>Yiwei Li</u>, “Predicting information seeking in the context of earthquake risk: Development of a cognitive model” . Paper presented at the International Communication Association (ICA)’ s 66th Annual Conference, Fukuoka, Japan, June 9 to 13, 2016. <u>Yiwei Li</u>, “Are you ready for mega disasters? Japanese people’ s disaster consciousness before and after the Great East Japan Earthquake” . Paper presented (remote presentation) at the 13th International Conference on Information Systems for Crisis Response and Management (ISCRAM), Rio de Janeiro, Brazil, May 22 to 25, 2016. 【査読なし】<u>А.Пудзимого</u> (Atsushi TSUJIMOTO) (2016)ОРГАНИЗАЦИОННАЯ ПСИХОЛОГИЯ НА ПРЕДПРИЯТИЯХ ВО ВРЕМЯ ПОЖАРОВ, ВЛИЯЮЩИХ НА ОКРУЖАЮЩУЮ СРЕДУ. НА ПРИМЕРЕ ХИМИЧЕСКИХ ЗАВОДОВ, НЕФТЕБАЗ И НЕФТЕПЕРЕРАБАТЫВАЮЩИХ ЗАВОДОВ”, СОЦИАЛЬНЫЕ КОММУНИКАЦИИ И ЭВОЛЮЦИЯ ОБЩЕСТВ(Материалы V Международной научно-практической конференции г. Новосибирск, 9–10 сентября 2015 г) , НОВОСИБИРСК 2016, pp.224-230. ◆【国内学会での発表】 渡部 淳「ポスト 3.11 のリスク社会における民主主義再生への展望と司法・メディア・NGOー政治的コミュニケーションの特異点としての言説空間の公共圏析出に向けて」第 13 回情報文化学会北海道支部研究大会, 2016 年 5 月 22 日・北海道大学 ◆【その他】 辻本篤 「<QC サークル>再考ー日産「New QC サークル」より」, 『物価資料』2016 年 11 月号, 一般財団法人 建設物価調査会, pp.18-19. 辻本篤 「身体活性化が組織活動に与える影響ーウェアラブルセンサが示唆するもの」, 『物価資料』2017 年 3 月号, 一般財団法人 建設物価調査会, pp.12-13.
----------	---

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

受付番号 (5)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月 日

採択研究題目	トランスナショナルな公共圏におけるメディア文化とアイデンティティ (「記憶と和解」)							
講座・コース名	メディア文化論							
代表者	浜井 祐三子							
連絡先	内線: 5378				email: hamai@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	浜井祐三子 (研究統括) <記憶・歴史・メディア班> 浜井祐三子、原田真見、玄武岩、竹中のぞみ、 ジェフ・ゲイマン、渡辺浩平、長井裕子、藤野陽平 <記憶・表象・メディア班> 西村龍一、増田哲子、金ソンミン、宇佐見森 吉、田邊鉄、周セイ							
研究協力者								
採択総額 (千円)	1400							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
							出版助成	1400
	計		計		計		計	1400
	予算総額 1400		—		決算総額 1400		= 0	
研究概要	2011 年から続けてきた共同研究のこれまでの成果を書籍の出版という 形で公開した。 『想起と忘却のかたち～記憶のメディア文化研究』(三元社、2017 年 3 月 20 日出版、総ページ数 322 ページ) (参考) 出版社のホームページ: http://www.sangensha.co.jp							
研究実績・内容	本書は、「記憶のメディア文化研究」という副題に示されているように、 記憶を媒介し、編成し、構築するメディア文化の役割に一つの焦点を当て、 歴史学、社会学、人類学、メディア研究など多様な研究領域の研究者がさ まざまな社会的文脈に現れる「想起」と「忘却」の社会的作用(「記憶」 とメディア(この場合、狭義の「マス・メディア」には限定されない、広 義での「メディア文化」としてのメディア)について考察を加えた論集と なっている。 メンバーのうち 9 名が論考を執筆した。また、2016 年度、客員として北 大を訪問中であったテッサ・モーリス＝スズキ氏(オーストラリア国立大 学特別荣誉教授)にも関連トピックでの論文を寄せてもらった。							

	[目次] 序章 記憶のメディア文化研究に向けて／浜井 祐三子 第1部 ナショナルな記憶のゆくえ 第1章 「想起の空間」としての「慰安婦」少女像／玄 武岩 第2章 記憶は誰のものか？—多文化社会イギリスにおける「記憶」と「歴史」／浜井 祐三子 第3章 創造される記憶としてのニュージーランドネスーパケハのアイデンティティとノスタルジアとしてのキーウィアナ／原田 真見 第2部 記憶を表すかたち 第4章 スペイン独立戦争の記憶と表象—ゴヤ《1808年5月2日》と《5月3日》を中心に／増田 哲子 第5章 「呼びかけと応答」—日系カナダ人アーティスト、シンディ・モチズキの アート・アニメーションにおける「記憶」の表現／西村 龍一・西村 美幸 第6章 ネット空間上の集合的記憶—転換期中国における「80 後」の集団的ノスタルジア／周 倩 第3部 忘却を超えて 第7章 死者の記憶が生きていたころ—吉田満と戦後／渡辺 浩平 第8章 日本人妻と日本語族を日本語でつなぐ—台北のキリスト教系デイケアセンター玉蘭荘の事例から／藤野 陽平 第9章 「社会の記憶」とメディア—「セウォル号」をめぐる韓国社会の「記憶闘争」／金 ソンミン 特別寄稿論文 アジア太平洋戦争における日本軍と連合国軍の「慰安婦」／テッサ・モーリス＝スズキ（日本語翻訳協力：浜井 祐三子）
研究成果・業績等	今年度は書籍出版に向けての作業（論文執筆の最終段階、編集、校正など）が中心となり、研究会の開催などは積極的に行われなかった。 ただし、下記のワークショップを共催し、メンバーの一部が参加、発表を行った。 「記憶と和解」プロジェクト／北海道大学サマーインスティテュート共催 ワークショップ 「戦争の記憶」 日時：6月27日（月曜）14時～17時 会場：メディア棟 608 スタジオ 【発表者】 渡辺浩平（北海道大学）「1970年代、吉田満にみる戦争の記憶」 奥田博子（関東学院大学）「日本における「ヒロシマ」と「ナガサキ」——記憶の抗争」 藤野陽平（北海道大学）「ポスト・コロニアル台湾で親日を選択する——台湾の独立派キリスト教を例として」 ファンデルドゥース・イシカワ・ルリ（ケンブリッジ大学）「特攻隊アイデンティティの選択的記憶化における視点——実証的研究の試み」 【コメンテーター】 グレン・フック（シェフィールド大学）

（A 4 判 2 頁以内で作成してください）

(参考) 平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金
成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月28日

採択研究題目	大学と地域の先住民族・マイノリティの対話と連携に基づいたエンパワーメントに関する研究							
講座・コース名	多元文化教育論講座							
代表者	ジェフ ゲーマン							
連絡先	内線: 5411				email: jeffry.gayman@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	(所属・身分) ジェフリー・ゲーマン (多元文化教育論講座・准教授) 玄武岩 (メディア文化論分野・准教授) パイチャゼ・スヴェトラナ (学術研究員)							
研究協力者	(所属・身分) 小田博志 (文学研究科・教授) 飯嶋秀治 (九州大学人間環境学府・准教授) Tibu Vayavana (台湾師範大学・准教授・ツオ民族出身) ボブ・サム氏 (アラスカ州クリンギット民族リーダー、長老、語り部)							
採択総額 (千円)	500							
使 途 の 明 細 (千 円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	レンタカー代金 (2回分)	70	外国人講師の招へい	230	外国人講師謝金	(旅費に込み)	シンポジウム広告費	60
					講師料	10	報告書の発送	20
					通訳料 (1人分)	20		
					データの書き起こし	64		
	計	70	計	230	計	94	計	80
	予算総額 500		— 決算総額		475		=25	
研究概要	当研究プロジェクトは以前ゲーマンらが科研プロジェクトで緩やかなつながりを持つアイヌの活動家 (文化実践者) たちと院内共同研究補助金でお世話になったことがある 米国アラスカ州のボブ・サム氏、また台湾のツオ民族出身の Tibu Vayayana 准教授を交え、行った国際的な先住民族の共同研究交流から現れてきた課題から発生したものである。 研究会の自由な討論から自然発生的に出てきた課題の中に、メディア・コミュニケーション研究院が従来行ってきた研究の対象領域と強い関連があるマイノリティ支援や多文化共生、地域開発から、民族教育の支援と言った課題まで、メディア・コミュニケーション研究院の研究者が地域の方々とともに取り組んできたものが多く含まれた。合わせて、アイヌの研究協力者の二人から、それぞれに運動支援の依頼と地域起こし活動への支援の依頼を受けたゲーマンは、それを受けて、科研プロジェクトの最終年度である昨年度に、アイヌの人々に共感されかつ研究領域はアイヌ側のニーズにあったものを専門とする研究者を加えて、新たなプロジェクトに乗り出そう、と思うよう							

	になった。H28 年の 5 月の時点ではこれは玄とパイチャゼではあったが、将来的に基盤づくりが固めれば言語教育を得意とする教員や観光創造の教員の加担も考えられる。 北大側に対しアイヌ側から要求されている支援を、遺骨返還の機会や、昨年既に予定されていたモーナシュ大学の岩淵功一教授が率いる研究チームを迎える シンポジウムや客員教員としてテッサ・モリススズキ教授を迎え入れることにともない、既存の基盤に加えることにより新たな研究プロジェクトの体制づくりに挑戦した。
研究実績・内容	① 玄がアレンジしたモーナシュ大学の岩淵功一教授とその研究仲間の来札に伴い、北海道における越境的多文化主義に関するシンポジウム「東アジアにおける移民とマイノリティ」を 2016 年 6 月 6 日に開催した。 ② 北海道大学からアイヌ民族の遺骨が浦河町杵臼に返還される日の前夜 (2016 年 7 月 14 日) にボブ・サム氏を招へいし、国際シンポジウム「アイヌ民族の遺骨返還の意義と研究倫理一心のこもった返還のために―」を開催し、また、翌日から大学院生を連れ、三日間に渡る再埋葬の儀式に関わる諸々の活動支援をした。 ③ 2016 年 12 月までゲーマン研に 9 か月研究院研究員として所属した、アイヌ民族出身の鶴澤加那子氏を交えた研究会「都市部に生きる先住民族-アイヌ民族からボリビア先住民族-」を 2016 年 12 月 20 日に開催し、北海道やボリビアの都市先住民族の現状と課題を検討した。
研究成果・業績等	① 小田博志 2016「戦後和解と植民地後和解のギャップ―ドイツ-ナミビア間の遺骨返還を事例に」『平和研究』47 (脱植民地化のための平和学) : pp. 45-65。 ② 『「アイヌ民族の遺骨返還の意義と研究倫理一心のこもった返還のために―」2016 年 7 月 14 日シンポジウム報告書』(全 52 頁) を発行した。 ③ 北海道大学の学長や理事たちにとともに、道内外のメディア機関や有識者にも配布した。学内でこのような催しを開催することにより、地元のアイヌ民族との対話と連携に基づいた研究基盤に必要な信頼関係が一步進んだことは、ゲーマンや小田が以降の集会等への継続的な招へいを受けていることから伺える。 また、シンポジウムが北海道新聞に取り上げられ、延べ 100 人以上の参加者の中に研究者 18 名、アイヌ民族 12 名の参加が見られたことから、学内の情勢や北海道の社会にそれなりの社会的反響があったといえよう。 ④ 一方で、Japan Focus 誌の特集号 (2017 年夏に出版予定) に、ゲーマンがモリス教授に共同執筆の原稿の投稿に協力依頼を受けていることから、研究プロジェクトの一つの目的であった新たな国際的共同研究基盤の形成ができつつあるといえよう。 29 年度の科研基盤 B の申請が不採択の結果となったが、この一年に構築した上記の業績をさらに発展させ、再挑戦をしたいものである。

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月27日

採択研究題目	多元文化教育の諸相							
講座・コース名	多元文化教育論分野							
代表者	眞崎睦子 (平成29年2月から寺田龍男)							
連絡先	内線: 5394				email: tterada@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	眞崎睦子 (メディア・コミュニケーション研究院・准教授) 研究代表者・研究の総括 (含・研究倫理に関する注意喚起) 分担領域「多元文化教育特論」(多文化共生論「ヒトの移動と教育」) に関連する研究 寺田龍男 (メディア・コミュニケーション研究院・教授) 分担領域「多文化理解論」に関連する研究 Jeffrey J. Gayman (メディア・コミュニケーション研究院・准教授) 分担領域「多元文化教育特論 (教育人類学とマイノリティ問題)」に関連する研究 青木麻衣子 (国際連携機構・准教授) 分担領域「比較・国際教育論」に関連する研究							
研究協力者	津々見崇 (東京工業大学・助教)							
採択総額	150.000							
使途の明細	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	眞崎	50.000		0		0	郵送費	13.065
	青木 (招聘)	45.840						
	計	95.840	計	0	計	0	計	13.065
							108.905	
	予算総額 150.000 - 決算総額 108.905 = 41.095							
研究概要	本プロジェクトは、メディア・コミュニケーション研究院多元文化教育論分野所属の3名と国際連携機構所属の1名からなる共同研究である。(この4名は教育学院多元文化教育論講座において各自の研究領域に関連した大学院教育を展開している。) 本申請の「多元文化教育の諸相」は、研究メンバー個々の研究力をさらに高めると同時に、従来はやや個別研究に偏りがちだった各構成員の研究を有機的に結びつけて組織化し、多文化共生をはじめとしてさまざまな課題を抱える現代社会への貢献を飛躍的に向上させることが目的である。またその成果により、大学院メディア・コミュニケーション研究院の研究体制の一翼を担うだけでなく、大学院教育学院における教育の質の向上も目指すものである。							

研究実績・内容	・眞崎睦子 招待講演 2 件（下記）、東京断酒新生会本部での情報・資料収集および公益社団法人全日本断酒連盟全国大会への参加と資料収集（旅費 50.000 円） ・寺田龍男 論文 1 篇（下記） 「後朝の歌」は世界中のほぼすべての文化圏に見られるが、その実態や本質の研究には今なお解明すべき問題が多くある。現在大学院教育で実践している「東西後朝考」を素材にして、人間の営みの共通性と文化圏による相違に焦点を当て、先行研究を再検討するとともに今後の発展の可能性を検討した。 ・Jeffrey J. Gayman 論文 1 篇（下記）および研究成果発送（郵送料 13.065 円） アイヌ民族を中心とする人々との応用的な共同研究を目指し、フィールドワークを中心とする教育活動や理念を記述した。また大学院生を調査研究に同行させ、シンポジウムや研究会の運営も担わせた。さらに、ともに研究に取り組む少数民族の方々と相互信頼関係を実体験で構築させた。その成果は大学院生・学部への授業にも還元させた。 ・青木麻衣子 研究協力者・津々見崇氏（東京工業大学助教）を招聘（旅費 45.840 円） 大学院教育学院での担当授業「比較・国際教育論 2016」に津々見崇氏を招き、自身の調査研究手法および内容について、特別講義をしていただいた。主題は北海道石狩市における住民参加のまちづくりについて、主にフィールドワークの意義と課題である。授業履修者のほかに、講座の大学院生も参加し、活発な議論が行われた。 上記 4 名の研究は、いずれも文化の多様性をポジティブにとらえて遂行されている。日本は人口が減少し続けているにもかかわらず出生率を上昇させるための具体的な施策が不十分である。また移民の受け入れに関しても厳しい制限がある。この状況で多文化共存社会の真の実現とさらなる発展を目指すメンバーが行う研究には、それぞれの視点を生かしつつあるとはいえ、なお大きな壁があることを認めなくてはならない。しかし、たとえ日本社会が健全に規模を縮小させるとしても、ダイヴァシティを実現することなく明るい未来を迎えるのは困難である。以上の認識に立ち、各メンバーはそれぞれが対象とする課題を解決するための研究を行い、同時に方法論の構築を目指した。（ゲーマンと青木が座学とフィールドワークの結び付け方で理論化を前進させたのは収穫の一つである。）今後は「エスニシティ」（仮題）をキーワードとして研究をさらに進め、できるだけ早期に論文集の公刊を目指す所存である。 なお本プロジェクトの代表として研究を導いてこられた眞崎睦子氏が平成 29 年 2 月に急逝された。そのためまことに遺憾ながら、同氏のご研究を十分には報告できないことをおわびしたい。
研究成果・業績等	眞崎睦子：（招待講演）「自助組織周辺の人間関係」第 7 回北海道断酒連合会 アメシストの会・平成 28 年 6 月 5 日、（招待講演）「社会問題としての飲酒」第 39 回 6 市交通安全連絡会議 10 月（砂川市） 寺田龍男：（論文）「多文化理解論の実践―東西後朝考―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』127（2016 年 12 月）p. 1-8 Jeffrey J. Gayman：（論文）「北海道大学での私の教育的取組の内容と理念―アイヌ的な要素が沢山ある環境の中の先住民族教育学、異文化間理解教育、質的研究法―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』127（2016 年 12 月）p. 77-90

（A 4 判 2 頁以内で作成してください）

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月28日

採択研究題目	帝国解体と女性：断絶／連続する脱植民地の生活世界							
講座・コース名	メディア文化論							
代表者	藤野陽平							
連絡先	内線: 5387				email: fujinoyohei@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	玄武岩 (メディア文化論・准教授) 富成絢子 (メディア文化論・准教授) パイチャゼ・スヴェトラナ (学術研究員)							
研究協力者	後藤悠樹 (株式会社 写真の高橋・写真家)							
採択総額 (千円)	400 千円							
使 途 の 明 細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	学会発表	64	サハリン調査	156	書籍	30	物品	1
	帯広調査	115	韓国発表	34				
	計	179	計	190	計	30	計	1
	予算総額 400 — 決算総額 400 = 0							
研究概要	大日本帝国の域内で生じた人の移動に伴い複雑化した民族とジェンダー関係は、帝国の崩壊や国民国家形成によってさらに大きくねじれ、重層化・複合化の度合いは格段に増すこととなった。これにより「中国残留婦人」や「サハリン残留日本人女性」、そして「在韓・在朝鮮日本人妻」等の帝国日本には存在しなかった女性のカテゴリーが現出した。こうした問題に、藤野、玄、パイチャゼのメンバーは個別に研究を進めてきた。共同研究の立ち上げに際しての議論を進める中で、多くの共通点と論点が明確になったのだが、共通して不足している点として、ジェンダー研究の観点が浮上した。そこで富成に加入してもらい、その欠を補いながら、「女性研究」の視点からの理論的考察を強化し、事例研究と両面的に研究を行った。 現地で結婚し、姻族に組み込まれた多くの「日本人」女性は帝国日本の崩壊後に旧植民地に生きることになった。そこは、民族的な序列構造の反転が起きた場であり、植民地期には上位にいた「日本人」という民族カテゴリーを持つ彼女たちは一転して下位に置かれることになる。一方、「日本人」ということで問題を抱えている彼女たちが帰国を望んだとしても、日本政府にとって「国際結婚」をした彼女たちは国籍上国民ではないために、非情にも引き揚げ・帰国の対象にならなかった。 このように「民族」という観点からみると帝国の解体は彼女らにとってそれまでの生活と断絶をもたらす出来事であった。しかし、婚姻、出産、家族関係、家族構造といったいわゆる「女性」の観点からは変転は緩やかで、植民地時代から引き継がれた連続性の中での生が維持された。 こうした問題意識から、本研究では断絶をもたらした「民族」と連続し引き継がれた「ジェンダー」という両方の要因のせめぎあい場として戦後の旧植民地における「日本人」女性の生活世界を明らかにする。							

研究実績・内容	本研究では定期的にメンバーが集まり議論を重ねた。それ以外にも各人がそれぞれのテーマに沿って以下の研究を実施した。藤野は、日本人妻が集う台北市内の施設での参与観察を行った。これまで台湾の事例から考えてきたが、日本の帝国主義を考える際にそれだけでは視点の偏りが生じかねない。そこで韓国の研究者との議論を行うために韓国の国立全南大学校において講演を行った。また、パイチャゼ、後藤による帯広調査に同行し、サハリンや北海道におけるポストコロニアルの状況を理解することで、より広い視野からの考察を行った。 玄は韓国でもこれまで注目されることのなかった在韓日本人女性を生み出した歴史的構造と、それが忘却へと帰結する政治的境界を明らかにし、これら在韓日本人女性を森崎和江のいう「国境に近い女性の歴史」に位置づけた。 富成は東アジアにおけるコロニアル期・ポストコロニアル期における女性の問題をジェンダー研究の観点から論点の整理を行った。 パイチャゼはサハリンで、朝鮮人家庭への子どもを養子に出し、また婚姻によって入った日本人女性の養子縁組、結婚、女性の立場に関する認識や行動と、当時に生活していたソ連の人口政策および制度の差異を明らかにした。 また、下記の2回のワークショップを実施した。メンバーの発表に加え、ゲストにも発表、コメントをいただいた。議論を深めることができたのは当然のこととして、さらなる成果として新たな人脈を構築することもできたことを挙げておく。1回目のWSでは、当時、外国人招へい教授として滞在中であったテッサ・モーリス・スズキ氏から、一人ずつの発表に対してコメントをもらい、大いに刺激をうけた。2回目のWSでは女性と東アジアの植民地主義に関する共同研究のメンバーや、植民地主義と観光の研究者との議論を経て、今後の本共同研究への協力関係を構築した。 本年度は本共同研究を基礎としてパイチャゼを代表として日本学術振興会の科学研究費、基盤研究B（一般）に応募した。結果は不採用であったが、不採用Aであった。審査結果開示により問題点も明確になっており、次年度も本研究を基礎として共同研究を継続し、基盤Bでの採択をめざすこととする。最終的に科研費のプロジェクトを通じて書籍の刊行を行う。
研究成果・業績等	①本共同研究主催のワークショップ 1, 「帝国の解体と女性一断絶／連続する脱植民地の生活世界」(2016.9.26) 2, 「帝国に残された人・物・映像」(2017.2.19) ②メンバーの本共同研究に関する研究成果・業績 ・論文 1, 藤野陽平 2016「台湾における「日本語」によるキリスト教的高齢者ケア 社団法人台北松年福祉会玉蘭荘の機関誌分析より」三尾裕子、遠藤央、植野弘子編『帝国日本の記憶 台湾・南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』慶応義塾大学出版会 2, 藤野陽平 2017「日本人妻と日本語族を日本語でつなぐ 台北のキリスト教系デイケアセンター玉蘭荘の事例から」浜井祐三子『想起と忘却のかたち 記憶のメディア文化研究』三元社 3, Paichadze S. 2017, Russian Language Abroad, Special Edition : Russian in Japan, pp. 82-85. ・口頭発表 1, 藤野陽平 2016.8「ポストコロニアル台湾における日本語とキリスト教ー日本語族台湾人、日本人妻の事例からー」(大韓民国、国立全南大学校日本文化研究センター日本研究フォーラム) 2, パイチャゼ S. 2016.6「サハリン残留者・帰国者の言語、アイデンティティと教育」, 日本移民学会、自由論題報告

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月21日

採択研究題目	ダークツーリズムの観光創造																																																							
講座・コース名	観光文化論講座・観光創造論講座																																																							
代表者	奈良雅史																																																							
連絡先	内線: 7325				email: naramasashi@imc.hokudai.ac.jp																																																			
共同研究メンバー	石黒侑介 (観光創造論講座) 観光マーケティング論 岡本亮輔 (観光文化論講座) 聖地観光／宗教社会学 金ソンミン (観光文化論講座) 東アジア観光文化研究／メディア社会学 奈良雅史 (観光文化論講座) エスニック・ツーリズム／文化人類学 花岡拓郎 (観光創造論講座) 博物館学／文化財保護 麻生美希 (九州大学人間環境学研究院) 世界遺産／都市計画																																																							
研究協力者	なし																																																							
採択総額 (千円)	200																																																							
使途の明細 (千円)	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">国内旅費</th> <th colspan="2">外国旅費</th> <th colspan="2">書籍・謝金等</th> <th colspan="2">その他</th> </tr> <tr> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> <th>事 項</th> <th>金額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>資料調査 (石黒)</td> <td>78.54</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>フィールド調査 (花岡)</td> <td>120.07</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>198.61</td> <td>計</td> <td></td> <td>計</td> <td></td> <td>計</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="8"> 予算総額 200 － 決算総額 198.61 = 1.39 </td> </tr> </tbody> </table>								国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他		事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	資料調査 (石黒)	78.54							フィールド調査 (花岡)	120.07							計	198.61	計		計		計		予算総額 200 － 決算総額 198.61 = 1.39							
国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他																																																		
事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額																																																	
資料調査 (石黒)	78.54																																																							
フィールド調査 (花岡)	120.07																																																							
計	198.61	計		計		計																																																		
予算総額 200 － 決算総額 198.61 = 1.39																																																								
研究概要	観光創造は、観光を通じた地域再生・振興、新しい文化や価値の創造などに貢献するものとして期待されている。その一方で、観光創造の資源となるものは、必ずしも「明るい資源」ばかりではない。戦跡、慰霊碑、津波・震災の被災地、事故現場、墓地、虐殺のあった場所なども近代的な観光産業のアトラクションとして活用されている。先行研究において、こうした実践は「ダークツーリズム」として主題化されてきたが、その「暗さ」を本質化する傾向にあり、その歴史社会的な構築性が等閑視されてきた。 以上を踏まえ、本研究では、複数の現地調査を進めながら、ダークツーリズム研究の理論的枠組みを示すことを目的とする。当該目的を達成するために、非西欧社会において単に地理的にではなく、政治的・経済的・文化的に周縁、或いは辺境に位置づけられてきた歴史を持つ地域をフィールドとして取り上げ、比較研究を行う。こうした周縁化が、これらの場所の観光化にどのように影響し、その中で、ダークツーリズムと呼びうる実践が創造される過程を剔抉することで、地域開発や観光振興の成否だけを問う二者択一的な図式に陥らない観光理解を目指す。																																																							

研究実績・内容	本研究プロジェクトでは、講演会とシンポジウムをそれぞれ 1 回ずつ開催した。前者は、首塚や柳田国男の研究で知られる民俗学者の室井康成氏をお招きし、2016 年 11 月 4 日（金）に本学メディア棟 608 にて開催した「首塚・胴塚・千人塚ー日本における「ダークツーリズム前史」試論」と題した講演会である。 後者は、2017 年 2 月 10 日（金）に本学高等教育推進機構 2 階 E219 にて、拡張現実研究会と共同で開催したシンポジウム「観光研究のフロンティア」である。本シンポジウムでは、本研究プロジェクトの共同研究メンバーである石黒侑介氏および麻生美希氏がその成果を発表した。それぞれのタイトルは下記する。 これらの講演会およびシンポジウムでは、本研究プロジェクトの目的に則り、日本、沖縄、エチオピアという複数の地域における具体的な事例から、ダークツーリズムと呼びうる実践の展開について議論がなされた。
研究成果・業績等	本研究プロジェクトにおける研究成果は以下である。 【論文】 奈良雅史 2016 「現代中国における宗教的状况をめぐる人類学的研究——二重の宗教的正統性と宗教実践のもつれ」『社会人類学年報』42 : 143-155、査読有り。 奈良雅史 2017 「旅するムスリム——現代中国における回族のイスラーム実践」『CATS 叢書（観光地域マネジメント寄附講座 10 周年記念『観光創造学へのチャレンジ』）』11 : 111-116、査読なし。 【研究発表】 奈良雅史 "A Change in Inter-ethnic Relationships amongst Hui Muslims: Entanglements of Islamic Revival and Ethnic Tourism in Contemporary China," The 19th Hokkaido University and Seoul National University Joint Symposium: Re-imagining East Asia in Tourism, 2016 年 11 月 25 日、北海道大学。 奈良雅史 「イスラーム復興と民族観光のもつれ——雲南省回族社会における民族間関係の変化をめぐる」、エスニック・マイノリティ研究会ワークショップ「マイノリティの文化実践と現代社会：台湾原住民の例を中心に」、2016 年 12 月 10 日、獨協大学。 石黒侑介 「エチオピアの北部ゴンダール県を訪れるイスラエル人旅行者の実態——ダークツーリズムの市場性に着目して」、院内科研共催シンポジウム「観光研究のフロンティア」、2017 年 2 月 10 日、北海道大学。 麻生美希 「文化的景観の制限なき資源化への抵抗——岐阜県白川村と沖縄県竹富島におけるホテル進出を中心として」、院内科研共催シンポジウム「観光研究のフロンティア」、2017 年 2 月 10 日、北海道大学。 奈良雅史 「移動によるエスニシティおよび民族間関係の変容——雲南省沙甸区の事例から」、現代中国における内国移動とエスニシティに関する共同研究・第 2 回研究会、2017 年 2 月 24 日、東北大学。 奈良雅史 "Keep on Moving: Informal Islamic Pedagogical activities amongst Hui Muslims in Contemporary China," International Conference "Ethnographies of Islam in China," 2017 年 3 月 28 日、SOAS China Institute, University of London。

（A 4 判 2 頁以内で作成してください）

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月27日

採択研究題目	文法化と語彙化のメカニズムと言語変異の研究							
講座・コース名	言語習得論講座・言語伝達論講座							
代表者	上田雅信							
連絡先	内線: 5111				email: ueda@imc.hokudai.ac.jp			
共同研究メンバー	飯田真紀 (言語伝達論講座・准教授) 林恒立 (言語習得論講座・助教) 李鳳 (北海商科大学商学部・講師) 平田未季 (秋田大学国際交流センター・助教)							
研究協力者	村山友里枝 (国際広報メディア・観光学院・博士課程3年) 楊雯淇 (国際広報メディア・観光学院・博士課程1年) 日高慶美 (国際広報メディア・観光学院・博士課程1年)							
採択総額 (千円)	200							
使途の明細 (千円)	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他	
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額
	学会発表	70		0	書籍費	36	大会参加費 (学会発表)	94
	計	70	計	0	計	36	計	94
予算総額 200 — 決算総額 200 = 0								
研究概要	この共同研究では、日本語、中国語、広東語、韓国語、英語の文末助詞、終助詞、談話標識、間投詞、ヘッジ表現、格標識、指示詞、副詞などを対象として、その意味・用法の記述的な研究を行うのと同時に文法化や語彙化のメカニズムの性質についても研究することを目的とした。さらにこれらの文法項目に関して言語間に見られる変異についても関連性理論やポライトネス理論や他動性という概念を用いて考察し、その性質を明らかにする試みを行った。これらの研究は、文法項目の記述的な研究を進めるのと同時に、関連性理論やポライトネス理論などを援用しながら、文法化や語彙化のメカニズムや言語変異の性質を統一的に説明する可能性を探ることが重要であることを示唆している。							
研究実績・内容	・2016年8月11日：研究会1 (北海道大学) (発表者：楊雯淇, 村山友里枝, 林恒立, 飯田真紀, 上田雅信) ・2016年8月17日：研究会2 (北海道大学) (発表者：日高慶美, 平田未季, 林恒立, 村山友里枝, 上田雅信) ・2016年9月10日：日本語教育国際研究大会 BALI ICJLE2016 (バリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター) (発表者：楊雯淇, 村山友里枝・上田雅信) ・2016年12月4日：日本言語学会第154回大会 (福岡大学) (発表者：楊雯淇, 飯田真紀) ・2017年3月11日：研究会3 (北海道大学) (発表者：楊雯淇, 日高慶美, 林恒立, 平田未季, 李鳳, 飯田真紀, 上田雅信) ・2017年4月2日 研究会4 (北海道大学) (発表者：村山友里枝)							

研究成果・業績等	<論文> ・日高慶美 (2017)「日本語の謝罪表現『ごめんなさい』と『ごめん』について—ポライトネス理論からのアプローチ—」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第 24 号, pp.39-55. ・平田未季・山本真理 (2016)「共同注意確立活動におけるア系の有標性—会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例—」『日本認知言語学会論文集』16, pp.228-240. ・平田未季 (2016)「共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択」『語用論研究』18, pp.28-47. ・Hirata, Miki (2017) “The addressee’s attention and addressee-anchored proximity: The semantics of the Japanese demonstrative middle term <i>so</i>.” 『秋田大学国際交流センター紀要』第 6 号, pp.1-22. ・楊雯淇 (2017)「手続き的意味による日本語談話標識『なんか』の分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第 24 号, pp.57-74. <講演・学会発表> ・飯田真紀「広東語と日本語の終助詞について」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」, 香港大学(中国) (2016 年 6 月 25 日) ・飯田真紀「広東語の文末助詞 <i>aalmaa3</i> の意味と意味変化」第 32 回中国語文法研究会, 筑波大学東京キャンパス (2016 年 9 月 10 日) ・飯田真紀「広東語の文末助詞 <i>aalmaa3</i> の意味変化」日本言語学会第 153 回大会, 福岡大学 (2016 年 12 月 3 日)* ・飯田真紀「広東語の文末助詞 <i>ge2</i> の意味と文法化」第 6 回漢語方言研究会, 神戸山手大学(2016 年 12 月 17 日) ・飯田真紀「跨語言視角下粵語句末助詞的定位問題～與日語句末助詞的比較～」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院主催国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」, 北海道大学 (2017 年 3 月 9 日) ・飯田真紀「粵語句末助詞“<i>ge2</i>”的兩種用法和交互主觀化現象」中国・中山大学中国語文学系 (2017 年 3 月 27 日) (招待講演) ・飯田真紀「跨語言視角下粵語句末助詞的定位問題～與日語句末助詞的比較」中国・中山大学中国語文学系 (2017 年 3 月 28 日) (招待講演) ・李鳳「日本における韓国語教育」, 国際学術シンポジウム『東アジアの言語と文学』, 全州大学人文科学総合研究所 (2016 年 10 月 5 日) (招待講演) ・李鳳「日本語と韓国語のポライトネス」, 『アジアの持続的な未来に向けて』北海商科大学(2016 年 12 月 3 日) (公開講座) ・平田未季・船橋瑞貴『『注釈挿入』における復帰時の照応表現の選択』日本認知言語学会第 17 回大会, 明治大学 (2016 年 9 月 10 日) ・村山友里枝・上田雅信「日本語と韓国語の目的語を標示する格の有標性とは動性—第二言語習得における学習困難度へのアプローチ—」日本語教育国際研究大会 BALI ICJLE2016, バリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター (インドネシア) (2016 年 9 月 10 日)* ・林恒立「台湾人日本語学習者による語用論的誤りの分析—『先生にアドバイスする』を例に—」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院主催国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」北海道大学 (2017 年 3 月 9 日) ・楊雯淇「手続き的意味による日本語談話標識『なんか』の分析」日本語教育国際研究大会 BALI ICJLE2016, バリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター(インドネシア) (2016 年 9 月 10 日)* ・楊雯淇「手続き的意味による中国語談話標識『怎么说』の分析」日本言語学会第 153 回大会, 福岡大学 (2016 年 12 月 3 日) ・楊雯淇「汉语话语标记“怎么说”的程序意义分析」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院主催国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」, 北海道大学 (2017 年 3 月 9 日) (*が付いた学会発表は一部共同研究費の助成を受けて行われたものである。)
----------	--

(A 4 判 2 頁以内で作成してください)

平成28年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金成果報告書

(2017年4月末日締切。総務担当へ電子提出する。)

提出日 2017年4月21日

採 択 研 究 題 目	多層言語環境で活躍する人的資源育成のためのオンライン国際協学プログラム開発へ 向けた総合的研究						
講座・コ ース名	言語伝達論・日本語論・言語習得論・国際広報戦略論・マルチメディア表現論・観光 文化論						
代表者	河合 靖						
連絡先	内線: 5372		email: ykawai@imc.hokudai.ac.jp				
共 同 研 究 メ ン バ ー	鈴木志のぶ (メディア・コミュニケーション研究院・教授), 金銀珠 (同・研究員), 小 林由子 (国際連携機構国際教育研究センター・教授), 山田智久 (同・准教授), 奥聡 (メ ディア・コミュニケーション研究院・教授), 北村倫夫 (同・教授), 清水賢一郎 (メデ ィア・コミュニケーション研究院・教授), 杉江聡子 (同・研究員), 林恒立 (北海道大 学・助教), 佐野愛子 (北海道文教大学・准教授・国際広報メディア・観光学院博士課 程院生)						
研 究 協 力 者	史宗玲 (高雄第一科技大学・教授), 吳怡萍 (同・教授), 黃愛玲 (同・副教授)・陳玫 君 (同・副教授), 萬美保 (香港大学・講師), 吉川貴子 (同・准教授), 吉村由紀 (マ サチューセッツ大学アマースト校・准教授), 横山吉樹 (北海道教育大学札幌校・教授), 林主恵 (北海道大学院生), 楊雲淇 (北海道大学院生), 謝昀叡 (北海道大学院生), 河 合カサンドラ (北海道大学・非常勤講師)						
採択総額	600,000						
使 途 の 明 細	国内旅費		外国旅費		書籍・謝金等		その他
	事 項	金額	事 項	金額	事 項	金額	事 項
			高雄第一 科技大学 研究者招 聘	263,280	同 時 通 訳 謝金 同 時 通 訳 機 器 技 術 者	160,000 51,840	シンポジウ ム資料コピ ー
	計	0	計	263,280	計	211,840	計
	予算総額 600,000ー 決算総額 485,120＝ 114,880						
研 究 概 要	国際的な人的流動性の活発化に伴い、多層言語環境がオンラインコミュニケーション および現実社会双方で急激に拡大すると予測する。本研究は、そうした多層言語環境で 活躍する人材の育成へ向けた、互惠的・自律的・協働的な第二言語国際協学プログラム 開発へ向けた総合的研究である。						
研 究 実 績・内容	今年度の院内科研「多層言語環境で活躍する人的資源育成のためのオンライン国際協 学プログラム開発へ向けた総合的研究」においては、採択継続中の科研 (B) を用いた 香港および米国を中心とした共同研究に加え、台湾から招聘した研究者を交えて国際シ ンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」を開催した。参加者は 40 名 (学内 24 名、学外 16 名)。うち、海外からの参加者及び外国人の参加者は 18 名であった。 今回のシンポジウムでは、日本語、中国語、英語のラウンドテーブルを設け、そこ での発表・討議を全体会で報告するという形式を採用した。パネル・ディスカッション では、香港にあるビジネス・ウィーク中国語版編集長 Vivian Kwok 氏による多言語環境 メディアの状況の紹介、北村倫夫北海道大学教授による日本の交通標識等の多言語化の 考察、史宗玲国立高雄第一科技大学教授による多言語社会台湾の現状と機械翻訳を用い た多言語能力開発への提言、金銀珠北海道大学研究員によるグローバル人材の育成を目 指した韓国語教育の紹介の後、フロアも交えて討議が行われた。						

研 究 成 果・業 績 等	国際シンポジウム 「多層言語環境時代の外国語教育」の発表は以下のとおり。 (2017年3月9日(木) 北海道大学学術交流会館) 10時10分～11時40分: ラウンドテーブル1		
	日本語テーブル (第4会議室)	中国語テーブル (第3会議室)	英語テーブル (第2会議室)
	黄愛玲・陳玫君(高雄第一科技大学) 【台湾】の言語環境と言語政策 ―近20年の動向を中心に―	史宗玲(高雄第一科技大学) 亞洲成人學習者之語言教育——「觀光翻譯磨課師課程」之教學問診	吳怡萍(高雄第一科技大学) Teaching Translation in a Multilingual Educational Environment
	横山吉樹(北海道教育大学札幌校) 香港のバンドシステムにおける EMI の評価と今後の可能性	杉江聡子(北海道大学) 通过远程交流创造出来的质性价值——中国学生的观点分析	吉村由紀(マサチューセッツ大学アマースト校) Teaching a Blended Course on Japanese Extensive Reading in the U.S. and Assessment
	吉川貴子(香港大学) 香港における日本人子女教育の現状	林主恵(北海道大学院生) 透過著重於英文搭配詞的線上寫作活動以增進應用字彙	河合カサンドラ(北海道大学) Imaginativeness and Flow in L2 Creative Writing
	今泉智子(北海道大学院生) 日本語・英語・中国語の可能表現—意味地図を用いた多義関係可視化の試み—		
	13時～14時30分: ラウンドテーブル2		
	日本語テーブル (第4会議室)	中国語テーブル (第3会議室)	英語テーブル (第2会議室)
	鈴木志のぶ(北海道大学) 議論構造の日・韓・米対照研究	飯田真紀(北海道大学) 跨語言視角下粵語句末助詞的定位問題・與日語句末助詞的比較・	奥聡(北海道大学) Arts and Science Courses in English: A Practice Report at Hokkaido University
	萬美保(香港大学) 教師または大学主導による学生のための国際体験	楊雯淇(北海道大学院生) 汉语话语标记“怎么说”的程序意义分析	佐野愛子(北海道文教大学) Educating Deaf Students as Bilinguals: The Cases in Japan and Hong Kong
	小林由子(北海道大学) 香港における日本語学習とポピュラーカルチャーとの関連—香港における日本のポピュラーカルチャーは日本語学習とどう関わるか	林恒立(北海道大学) 「建議老師」與語用失誤	河合靖(北海道大学) Combining Online Language Exchange with Public Speaking
	山田智久(北海道大学) 多言語社会における日本人学生の「グローバル」の捉え方に関する調査	謝昀叡(北海道大学院生) 華語學習者在面對面及遠距形式中的溝通策略之考察研究-以反饋詞為中心-	
	14時45分～15時45分(小講堂): ラウンドテーブル報告(同時通訳) 報告者: 萬美保(香港大学)・飯田真紀(北海道大学)・佐野愛子(北海道文教大学) 16時～17時30分(小講堂) パネル・ディスカッション「東アジア多言語主義は現実か幻想か」(同時通訳) Vivian Kwok(ビビアン・クオック)(ブルームバーグビジネスウィーク中国語版編集長): The Growth of Chinese Bloomberg Businessweek in Hong Kong amid Media Downturn 北村倫夫(北海道大学): 「日本のインバウンド対応多言語表記の社会的是非をめぐる議論の構造と展望」 史宗玲(高雄第一科技大学): Machine-translation-enabled Multilingualism for Ethnic Diversity in Taiwan Massive Open Online Course 金銀珠(北海道大学): グローバル人材の育成を目指した大学韓国語教育		
	本シンポジウム HP: http://mithrandir.iic.hokudai.ac.jp/sugie/hkp48/?cat=9		

(A4判2頁以内で作成してください)